

2015年（平成27年）5月21日（木）

第17回 PIC 懇談会（於：アーク森ビル カラヤン広場）

## 第二部 南太平洋で暮らす、南太平洋から学ぶこと

【1/5】

司会（ベティ）：

それでは第2部に移らせていただきます。第2部は、もんでん奈津代さんへのインタビューです。聞き手は太平洋諸島センター所長の小川和美です。では小川所長、よろしくお願ひ致します。

小川和美 PIC 所長（以下「小川」）：

皆さんこんにちは。きょうはお集まりいただきありがとうございます。

私は2008年から2010年までツバルで働いていたことがあるのですが、そのときに、ツバルの離島に子ども連れで暮らしている日本人女性がいるということを知り、仲間から聞きました。どんな方なんだろう、さぞかし豪傑なんだろうなあと考えていたら、その方が首都フナフティに戻ってこられてお目にかかるチャンスがありました。逞しい行動力からは意外なぐらいソフトでチャーミングな方で、私は一遍にファンになってしまったのですが、それが今回のゲストもんでん奈津代さんです。

今日は皆さんといっしょに、たっぷりツバル離島暮らしの話をお伺いしようと、私もたいへん楽しみにしているところです。それではご紹介いたします。京都からお越しいただきました、もんでん奈津代さんです。（拍手）

### もんでん奈津代さんとツバル

もんでん奈津代（以下「もんでん」）：

みなさんこんにちは。ツバル語でタロファ！

小川：

タロファ。

タロファは、ツバル語で「こんにちは」という意味で、ハワイで言う「アロハ」ですね。さてさてもんでんさん、今日のこのお召し物は？

もんでん：

これはツバルのナヌマンガ島で作ってもらったお祭りの時に着る服です。島ではお祭りの時には競ってこういう手作りのカラフルな服を作り、花冠をするんです。

小川：

今日は「パシフィック・フェスタ」、お祭りですもんね。お気遣いありがとうございます。



小川：

さてではまず最初にツバルの場所と行き方を簡単にご説明しましょう。ツバルは、太平洋のほぼど真ん中、赤道の少し下、日付変更線の少し左にあります。どこから行くのが一番行きやすいかといえますと。

もんでん：

フィジーからしか行けません。50 人乗りの飛行機が週 2 回だけツバルの首都フナフティに飛ぶのですが、普通はそれしか行く方法はありません。運が良いと年に何回かフィジーから出る船に乗れますけど、船だとフィジーから 3 日かかります。

小川：

まずフィジーに飛んで、そこから小さな飛行機で着くのが首都のフナフティ、ここまで日本を出て最短で丸二日になります。私はそこに住んでいたんですけど、もんでんさんが住んでしたのは……

もんでん：

首都フナフティから平均月に 1 回ぐらい北部離島行きの船が出ます。私はその離島の中のナヌマンガ島というところに行っています。

小川：

離島行きの船って、かなりスケジュールが不安定なんですよ。

もんでん：

政府の船なので、一応政府庁舎にスケジュールが書いてあるのですが、全然あてにならなくて、2 カ月来ないこともあります。ですんで私が日本からナヌマンガ島に行くときは、いつも着くまで 2 カ月ぐらいは見積もって行きます。

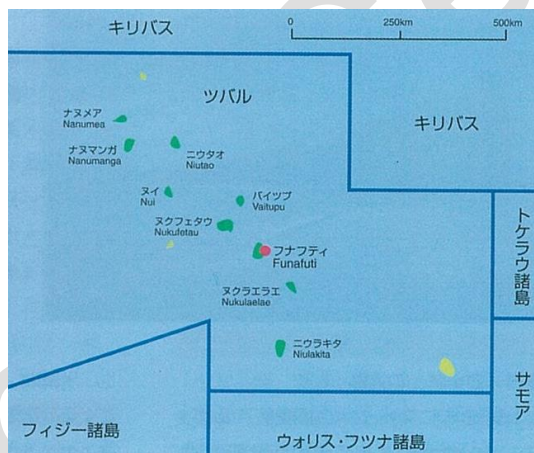
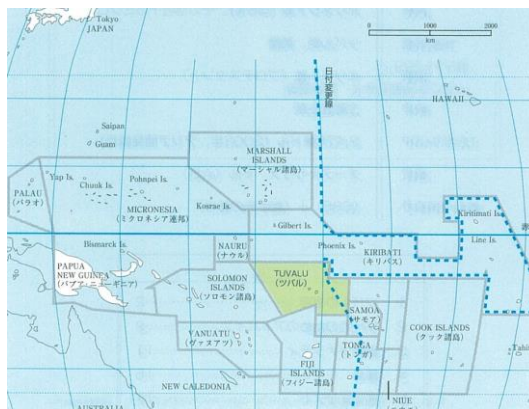
小川：

ツバルの離島って、いつ島に着けるのか、いつ島から帰ってこられるのかが全然わからないという、日本ではちょっと信じられないような世界なんですよ。

ところで、そもそももんでんさんがツバルに行こうと思ったのはなぜなんですか？

もんでん：

私も小川さんと同じで南の島が大好きで、ソロモン諸島のマライタ島とか、サモアのサバイ島に行ったりしていたんですけど、次はどこへ行こうかな、田舎がいいなと思っていたときに「人口が 1 万人という国がある」と聞いて、そこに行こうと決めました。初めて行ったのが 2004 年のことでした。



小川：

それからもうツバルばかり？

もんでん：

はい。それ以来、日本とツバルの往復です。離島の暮らして本当に楽しくて、それまで、サモアまでは、せいぜい行って 3~4 カ月だったのですが、ツバルでひとつの島に 6 カ月とか 9 カ月とか居てみたら、もう島の人と家族になってしまって。それまでは、さて次はどこに行こうか、みたいな感じだったのですが、ツバルの離島に住んで一緒に畑仕事とかしたりしているうちに、ツバルが自分の居場所になってしまって、日本に戻らなきゃいけない日が近づくと、次は「いつ帰ってこられるだろう……」という気持ちになってしまったりします。

### ナヌマンガ島というところ

小川：

すっかり島に溶け込んでしまっているもんでんさんですが、ツバルで暮らしてらっしゃるナヌマンガ島というのは、どれくらいの方が住んでいるんですか？

もんでん：

だいたい 600~650 人ぐらいです。

(もんでん追記：2012 年の最新国勢調査では約 500 人)

小川：

いつ次の船が来るかわからない絶海の孤島に 600 人……そうすると島の人たちはみんな顔見知りみたいな感じですか。

もんでん：

そうですね。基本的にみんな知りあいです。で、1 カ月か 1 カ月半に 1 度船が来ると、その船に乗ってきたよその島の人が上陸して（注：ツバルでは通常一回の航海で 3 つぐらいの離島をまわる）村の中を歩いたりするんですが、そうすると島の方は「ティノフォウ（新しい人）が歩いてるよ」、「あの新しい人はどここの島の人だよ」と囁きあったりしますから。

小川：

外界との接触が月に一遍、或いは時によってはもっと長い間船が来ないこともあるんですね。そうすると島の暮らしはどうなっちゃうんですか？ ガソリンとか食料なんかもなくなっちゃうと思うんですけど。

もんでん：

そうですね、たしかにみんな普段は、ビデオを見たり、豚小屋とか畑に行くのにバイクを使ったり、最近は輸入したお米を食べたりしているので、船が来ないと不便にはなりません。私が島にいるとき、3 カ月船が来なかったことがあるのですが、たしかに不便になって、ガソリンがないから畑には自転車ではいかなきゃ、とか、1 日 1 時間しか発電所が動かな

### ナヌマンガ島



いからビデオが見られないよ、とかみんな言っていました。でも島には食べるものはあるし、別に生活全部を電気やガソリンに頼っているわけではないので、普通に元気に、「ちょっと普段より不便な暮らし」という感じでした。このあたりはホント全然日本とは違うなと思いました。

小川：

日本だと難攻不落の小田原城も3カ月で落城したんですけどね。水はどうしていましたか？

もんでん：

水は、昔は井戸とかもあったんですが、今は雨水を貯水タンクに貯めています。赤十字あたりは「ちゃんと沸騰させてから飲もう」と宣伝していますが、みんな面倒くさいからよくそのまま飲んじゃっています。(もんでん追記：きちんと沸騰させる家庭もある)

小川：

雨水は美味しいですけど、でも貯水タンクってけっこう中にゴム草履やゴミがたまっていたりしますよね。

もんでん：

貯水タンクから水を出すとボウフラとか一緒に出てきたりするんですよね。でもその辺の棒でぴっとボウフラをはじいてがーっと飲んでいました。

あと、今日履いてきたこのサンダルですけど、これじつはナヌマンガのとうちゃんが、壊れた貯水タンクのプラスチックを加工して作ったものなんですよ。

[<第2部 Part2「ツバルの離島暮らし」に続く>](#)